

アルケイアー記録・情報・歴史
第五号 二〇一一年三月 二七―五三頁
南山大学史料室

ウイスクンシン大学アーカイブズ
の発展経緯と
今日的課題

五島敦子

Historical Development and Current Challenges of
the University of Wisconsin Archives

GOSHIMA Atsuko

archeia: documents, information and history

No.5 March, 2011 pp.27-53

Nanzan University Archives

ウイスコンシン大学アーカイブズの発展経緯と今日的課題

五島敦子

はじめに

本稿の目的は、アメリカにおける大学アーカイブズの一事例として、ウイスコンシン大学アーカイブズ（以降、UWアーカイブズと記載）をとりあげ、その発展経緯と今日的課題を明らかにすることである。

日本の大学アーカイブズは、周知のように、一九七〇～八〇年代以降、各大学の沿革史編纂の過程において、史料の収集と保存の必要性に基づいて設置されてきた。ところが、今日では、「大学改革論としての大学アーカイブズ論」が唱えられ、「新しい役割」が期待されているという¹⁾。すなわち、「大学の独自性」や「建学の精神」といった「大学アイデンティティ」を明らかにすることが求められる今、大学アーカイブズは、大学にとっての「永続的、恒常的な自己点検の場」として、「メッセージを発信する」ことでアカウンタビリティ（説明責任）に応えるという役割を担っている²⁾。

アメリカでは、こうした傾向はさらに顕著である。アメリカでは、一九八〇年代以降、州政府が公的資源のアカ

ウンタビリティという考え方から、州の財政援助に見合った成果を州立大学に求めるようになった。一九九〇年代に入ってから、その傾向は強まり、実績による資金配分を多くの州政府が導入した⁽³⁾。バーケルによれば、大学を取り巻くこのような社会的要請に因應するために、今日の大学アーキビストには、次の四つの「新しい役割と挑戦」が求められているという。それらは、(a) 大学の使命とアーキビスト業務の関係性、(b) 機関評価に対する必要性、(c) デジタル・テクノロジーの普及とそれに関連する全国的な水準と正規的教育訓練の登場、(d) デジタル様式の情報に対する直接的で包括的なアクセスを求める利用者の期待の増加、という四つである。たとえば(b)「評価」の場合、三〇年前に大学アーカイブズが提供していた資料は、各学期のコース内容や成績だけであったが、今では、「教室で何が教えられたか、何を教員が教えたか、学生がどのように学んだか、どのような記録がラーニングアウトカムを測定できるか」を検証する記録の保存が求められている。「理事会、納税者、州および連邦政府、授業料支払者、地域高等教育基準協会」に対するアカウンタビリティが問われているからである⁽⁴⁾。

この新しい要請に対して、アメリカの大学アーカイブズはどのように応えようとしているのか。大学アーカイブズの管理形態やスタッフの状況は、大学毎にバラエティがあり、設立時期も多様である⁽⁵⁾。アメリカの場合も、正規の形態を備えた、いわゆる「アメリカ的アーカイブズ」が成立したのは第二次大戦後とされるが、個々の設立経緯や活動内容は多様であり、詳細は十分に知られていない⁽⁶⁾。UWアーカイブズに関しても同様で、二〇〇九年と二〇一〇年の現地調査によって、発展経緯や活動概要をまとめた論稿はないことが判明した。

そこで、本稿では、まず、UWアーカイブズの発展過程をたどり、アカウンタビリティが求められた経緯を明らかにする。次に、現在の活動と組織の概要を、UWアーカイブズがどのようにアカウンタビリティを果たそうとしているのかという視点から考察する。そのさい、とくに記録管理と情報公開の問題に焦点をあてる。もちろん、大

学アーカイブズの活動はアウトリーチや展示など多岐にわたるが、ここでは、筆者の力量の限界から、利用者の立場⁽⁸⁾による事例紹介というスタンスで、焦点を絞って上記の課題を探求していきたい。最後に、これらの分析をまとめたうえで、今日のUWアーカイブズが直面している課題を提示する。検討にあたり、二〇〇九年と二〇一〇年の調査⁽⁹⁾、および、UWアーカイブズおよび関連組織のホームページ（以降、HP）掲載事項を活用する。

一 ウイスコンシン大学アーカイブズの設立と展開

（一）アーカイブズの設立

UWアーカイブズの設立は一九五一年に遡る。その契機は、一九四六年にフレッド学長が、ウイスコンシン大学創立百周年を記念する大学史を刊行するために、史資料を永久的に保管する施設をつくることを提案したことであった。最初のUWアーキビストは、一九三七年からUW図書館に勤務し、当時はUW図書館長だったドアン（Gilbert Doane）であった⁽¹⁰⁾。

アメリカ最大のアーキビスト団体は、一九三六年に設立された全米アーキビスト協会（Society of Archivists Association: SAA）で、大学アーカイブズ委員会がその一部門として置かれたのは一九四九年である。アメリカでは、一九世紀後半にヨーロッパとは異なる「アメリカ的」な大学が創立されたが、当時、多くの大学が創立百周年を迎えようとしていた。それゆえ、記念史編纂の機運が高まり、記録の収集と保存のためのアーカイブズが必要となった⁽¹¹⁾。UWアーカイブズの設置は、そうした大学アーカイブズ草創期の一事例といえるだろう。

UWアーカイブズの充実は、同大学歴史学教授であったカーティ（Merle Curti）とカーステンセン（Vernon

Carstensen)の貢献によるところが大きい。彼らによって編纂されたウイスコンシン大学通史(一九四九年)は、「その後の個別大学史編纂の一つのモデルとなる」優れた大学史研究とされる⁽¹²⁾。彼らは、ドアンや、州歴史協会のアーキビスト(以降、州アーキビストと記載)であったボエル(Josse E. Boell)、および、大学院生らと協力して、大学史編纂のための史資料を大学創立期にまで遡って精力的に収集した。その様子は、「プログラムが実際にはじまったのは、カーティ教授とカーステンセン教授が二巻の大学史を書いてきたときだった。彼らは恐ろしいほどの形相で記録を発見した」と回顧されたほどである⁽¹³⁾。その頃、公文書保管に関する州法(一九四七年)を受け、大学でも、非現用文書の分類を決定する権限をもつ大学アーカイブズ委員会が設置された。同委員会には、理事会事務官のホワイト、大学事務官のスマイス、大学図書館長のカルパン、州アーキビストのボエルに加えて、カーティとカーステンセンが参与していたように、UWアーカイブズの任務を定める上でも二人は重要な存在であった⁽¹⁴⁾。

一九五八年の資料によれば、大学アーカイブズ委員会の構成員やアーキビストの雇用に関しては、直接、学長から任命されるというように、この頃には、UWアーカイブズは大学図書館と別の組織となっていた⁽¹⁵⁾。その資料には、フレッド学長から各部署代表に宛てて非現用文書の遺棄を禁止する通達が出され、カーステンセン教授が委員長を務める大学アーカイブズ委員会が史料保存に関する規約を定めたことも示されている⁽¹⁷⁾。そのさい、大学アーカイブズの保管対象は、大きく二つとされた。その一つは、紀要、回覧、研究文献、調査研究、連絡、カタログといったあらゆる公的文書である。大学あるいは学部・学科によって作成・受理されたこれらの公的文書は、州公文書保存委員会の許可のない限り、破棄が禁じられた。もう一つは、ウイスコンシン大学固有の史資料で、その分類番号にちなんでIWコレクションと呼ばれた。そこには、大学の成長や発展、あるいは、学生および大学人について、彼らの国内外での活動を示すような、記事、遺品、写真、図画といったものが含まれた。非公式の刊行物や学生クラ

ブの記録など、個人から提供されるものも含めて、ウィスコンシン大学に関わるものすべてが対象であった。⁽¹⁸⁾
 アメリカのアーカイブズは、「機関アーカイブ」と「収集アーカイブ」の役割があるとされるが、UWアーカイブズは、当初より、この二つの役割を区別しつつ、両者に属する資料を保管したことになる。

(二) コレクションとアーキビストの充実

一九五九年に、ドアンの後を継いで、ボエルがUWアーカイブズのディレクターに就任した。彼は、ネブラスカ大学で歴史学修士を取得し、一九四七年から州アーキビストを務めていた人物である。彼のもとで、一九五九年から一九六一年には著名な教授の肉声を録音するなどの新しい試みにも挑戦した。この頃、ウィスコンシン大学の主要図書館であるメモリアル・ライブラリー四階には、五〇〇〇立方フィート、すなわち約一〇〇〇キャビネットに相当する所蔵スペースが確保されていた。⁽¹⁹⁾一九六六年のSAAによる調査(一一五六校対象)によれば、専任アーキビストをおく機関は九%であり、一〇〇〇立法フィート以上の所蔵スペースをもつ機関は五%にすぎなかったことを考えると、UWアーカイブズの充実ぶりがうかがえる。⁽²⁰⁾

一九七一年に、ウィスコンシン州では、ウィスコンシン大学とウィスコンシン州立大学システムを統合し、新たにウィスコンシン大学システム(UWシステム)が誕生した。UWシステムは、当初、エクステンションと複数の州立大学を合併して誕生したが、現在では、一三校の総合大学と一三校の二年制カレッジおよびエクステンションを統合する組織となっている。統合に伴い、エクステンション、メディカル・スクール、州保健衛生試験場、農科カレッジなど、それまで別組織であった部局の記録が統合され、大学のウェスト・キャンパスにあるステーションボックス・ライブラリーに六〇〇〇立法フィートもの資料が移管された。⁽²¹⁾その後は、メモリアル・ライブラリー

には、文理学部と大学管理運営に関する記録が所蔵され、ステイーンボック・ライブラリーには、農学部、工学部、メデイカル・スクールなどの学部、および、エクステンションやUWカレッジの記録が所蔵された。こうして、二〇〇七年まで、二つのアーカイブズによって記録が保管されることになった。

一九七一年には、ボエルの後を継いで、クック (J. Frank Cook) がディレクターに就任した。彼は、一九六一年からウィスコンシン大学の大学院生としてUWアーカイブズの業務に従事してきた人物で、二〇〇〇年までディレクターとして在職した²³⁾。彼は、一九八二年度の全米アーキビスト協会会長を務め、他大学のアーカイブズ調査にも携わった大学アーキビストである。彼のほかに、一九七〇年代は、記録管理を専門とするクンデ (Nancy Kunde)、コンピューターと情報管理を専門とするマサー (Steve Masar)、写真管理を専門とするシュメルツァー (Bernard Schmetzler) など、その後の三〇余年にわたり、UWアーカイブズに勤務したアーキビストが雇用された時代であった。アメリカで専門職としての大学アーキビスト職が確立されたのは一九七〇年代とされるが²⁴⁾、彼らはまさにそうした専門職たちで、UWアーカイブズの発展に貢献した。

アーキビストたちは、同窓生に資料提供を呼びかけ、公的な記録以外にもさまざまな資料が収集された。アメリカの高等教育が拡大した一九六〇年代から一九七〇年代において、アーキビストの関心は、「アクセスよりも獲得に重点が置かれていた」とされる²⁵⁾。散逸し破壊される前にいかに過去に遡って史資料を確保するかが主たる課題であり、UWアーキビストもそうした要請のなかで、収集に尽力したと考えられる。

一九七一年には、名誉教授らを対象にしたオーラル・リサーチ・プロジェクト (オーラル・ヒストリー) が開始された。また、当時は大学博物館がなかったため、ステイーンボック教授のビタミンド実験に用いられた犬のはく製や、バスカム学長の杖といったものも保管されていた。多様な史資料が集積されていた当時のアーカイブズの状

況は、以下の同窓会誌の記事から想像できる。

「入ってみると、すぐ右側に、学生からジョン・バスカム学長に捧げられた一八八七年のプロンズ・カップがある。カップの次のキャビネットには、ニセアカシアでできた小槌と台座がある。もう少しいくと、左手に一八八五年に遡る卒業記念アルバム (Badger yearbooks) と一八九二年からの大学新聞 (Cardinals) がある。(中略) もつと奥にいくと、一九〇〇年代に人気があった学生のスクラップブックの束がある。切り抜きや入場券、写真といったものが含まれており、当時の学生生活をよくイメージできる。もっといいのは、一八〇〇年代後半に遡る「クラス・ブック」をみることである。学生は、自分の写真の隣に自分自身のことや学生生活について書きとめている。」²⁶⁾

このようにコレクションが拡大する一方、この記事には、以下のようなアーキビストの嘆きも記されている。「史資料収集の問題は、キャンパス内の多くのオフィスが、アーカイブズを古いファイルの保管場所というよりも、墓地と考えていることである。スタッフは、自分たちが受け取るものが、歴史的な史資料というより、その時代の残骸や残り物であるという事実²⁷⁾に嘆いている。」

すなわち、史資料は蓄積されていくものの、その価値が十分に認められず、活用方法が十分に開発されていないことがあった。それゆえ、「史資料のマイクロフィルム化と保護をすすめ、アーカイブズを研究ツールとして活用することに重点を置く必要がある²⁸⁾」として、アクセスの開発が訴えられた。

一九八〇年代には、州歴史協会との協力で、多くの大学人の個人文書がマイクロフィルム化された。たとえば、「ウィスコンシン革新主義者 (Wisconsin Progressives)」と題するシリーズでは、ウィスコンシン州の革新主義改革のブレインとして活躍した大学人たちの文書がマイクロフィルム化され、各文書の索引をまとめたガイドブックも刊行された。²⁹⁾ 当時は、アメリカ経済の後退を受けて高等教育予算が大幅に削減されたため、学内各部署に対して、予算

に見合った成果が求められるようになった時代であった。こうした史料公開の努力は、そうしたアカウンタビリティの潮流の中に位置づけることができるであろう。

(三) 二十一世紀に向けた将来構想

一九九二年に、UWアーカイブズは、記録管理の効率化のためにウイスコンシン大学の総合図書館システム (General Library System) に統合された。UWアーカイブズは、前述したように、一九五〇年代末に大学図書館とは別組織となったが、このときの再統合によって、大学の記録管理機能とアーカイブズ機能が直結する組織「大学アーカイブズと記録管理 (The University Archives and Records Management Services)」として、総合図書館システムの一部に組み込まれた。

一九九五年に、UWアーカイブズは、『ウイスコンシン大学マジンソン校アーカイブズの将来に関する報告書』(以下、将来構想報告書と記載) をまとめた。そこには、二十一世紀におけるUWアーカイブズの指針として「大学アーカイブズの将来構想」が示されている。本報告書は、その後も繰り返し参照されてきた重要な文書である。一九九〇年代の大学図書館は、アカウンタビリティの要求の高まりとともに、情報技術の絶え間ない革新に挑戦するという課題に直面していた。³¹⁾ UWマジンソン校でも、オンライン蔵書目録である Madcat の構築がすすむとともに、一九九三年に学生にメールアカウントを割り当てるなど、インターネット時代が到来していた。アーカイブズの見直しは、このような大学図書館全体の改革の中で行なわれたのである。

将来構想報告書 (一九九五年) の作成にいたった直接的な契機は、一九九三年に、農学部 of 映画作成者のアルバートからフィルム類の寄贈を申し込まれたことであった。そのさい、映画、ビデオ、音声テープ、デジタル画像や

さまざまな電子媒体に対して、アーカイブズが今後どのような指針をもつべきかが問われた。そこで、一九九三年一月二二日に副学長の任命によって「アーカイブズ将来構想委員会 (Committee on the Future of Archives)」が設置され、現状や今後の方針について検討されることになった。同委員会が託された課題は、①保管、分類、および、アーカイブズを維持している現在の方法にはどのようなものがあるか、②アーカイブズの期待される成長とは何か、また、どのような記録が大学によって維持されるべきかをどのように決定すべきか、③伝統的および新しい史料を、将来にわたって維持し保管するために予想される費用と問題とは何か、④特定し議論されるべき問題の他の側面はないか、という四つの問いに応えることであった。⁽¹³⁾

調査をすすめるうちに明らかとなったのは、現状のままでは、一九九八年までに所蔵スペースが満杯になり、新たな史料を保管できないという物理的限界であった。これにより、アーカイブズが何をどう保存・提供すべきかをめぐって議論が繰り返され、「アーカイブズ原則 (Principles of the Archives)」が確認された。それらは、要約すると次の五つとなる。⁽¹³⁾

- ① 基本的義務・研究データを含む永久的価値のあるデータを維持・保存すること、第一次史料を保存すること。
- ② 重要な情報・情報は大学コミュニティにとって重要な資源である。それは、総合的な事業経営体の「知的資本」であり、財政的、法律的、実際の、文化的、歴史的な価値を持つ。
- ③ テクノロジーの影響と電子記録の管理・現存する大学の記録を電子書式で保管し、アクセスでき、検索でき、利用可能にすること。

- ④ 公文書とファカルティ文書の保管…アーカイブズは歴史的に公文書保存に力点が置かれてきたが、大学の発展、すなわち大学の意思決定がどのように行なわれたかを理解できる史資料が必要とされている。そのためには、ファカルティの文書（とくに、大学の活動や方針、専門領域の成果を示すもの）、オーラル・ヒストリー、写真、作品、遺品などを個人的な資源も含めて収集すること。
- ⑤ 記録管理とアーカイブズ…公的な記録管理を委託されている州立機関として、アーカイブズが効率的かつ経済的に運営され、記録管理業務と統合されること。

以上から、二十一世紀のUWアーカイブズは、第一次史料の保存という基本的な義務に加えて、情報を大学の「知的資本」ととらえ、大学が何をどのように生み出してきたかを他者に説明できる史資料を広く収集するよう求められたことがわかる。さらに、それらを社会に公開できるよう電子記録化をすすめる、記録管理の統合を効率化していくこと、といった原則が確認された。換言すると、州立大学がもつ公的資源の価値と効用を証明するというアカウンタビリティを確保する手段として、アーカイブズの使命が再確認されたといえよう。

将来構想報告書（一九九五年）の最後では、以下のように、「知の保存と伝達」というアーカイブズの使命を全うするために、上記の原則が遵守されるべきであると訴えられている。

「二十一世紀の大学アーカイブズは、今日のアーカイブズとは全く異なるものになるであろう。フリッツ・アルバートの映画コレクションで起こったことに匹敵する問題は、これからもしばしばおこるであろうし、思慮深く創造的な答えが要求される。これらの将来の挑戦に因應するために、アーカイブズは第一の使命、すなわち、知の保存と伝達という使命を実現しつづけなければならない。これらの原則によって、この使命が確実に実行されることが

忠実に守られなければならない。」

二 ウィスコンシン大学アーカイブズの組織と活動

(一) 組織とスタッフ

UWアーカイブズは、前述したように、記録管理 (Record Management) と対をなして「大学アーカイブズと記録管理」(以下、ARMS / Archives and Record Management Service という俗称で表記する)⁽³⁴⁾ という組織を構成している。ARMSは、ウィスコンシン州法にもとづいて州の公的記録を保管し、教職員法と大学アーカイブズ委員会⁽³⁵⁾で決定される方針にもとづいて管理されている。UWマジソン校だけでなく、UWシステムの管理運営、エクステンション、UWカレッジ・システムに関する公的な記録管理を担っている。

二〇一一年一月現在、UWアーカイブズのオフィスは、ステーションボックス・ライブラリー四階に置かれている。将来構想報告書(一九九五年)が契機となり、所蔵スペース不足に対応するためにステーションボックス・ライブラリーの地下室が改修され、二〇〇七年にメモリアル・ライブラリーから史資料が移転された。移転された史資料は、一二〇〇〇立法フィート、約一六〇〇〇箱にも及んだ⁽³⁶⁾。この移転により、一九七〇年代以来、ステーションボックス・ライブラリーとメモリアル・ライブラリーにあった二つのアーカイブズが統合されたのである。現在では、二六〇〇〇立法フィートの紙媒体の資料、二五〇〇〇点以上の写真、一〇〇〇件のオーラル・ヒストリー、フィルム、ビデオ、覚書などが保存されているという⁽³⁶⁾。

スタッフは、ARMS全体で七人で、そのうち五人が専任職である。クックが退職したのち、ナル(David Null)が、

二〇〇二年にディレクター代行となり、二〇〇五年にディレクターに正式に就任した。彼は、ウィリアム・アランド・メアリー大学で歴史学修士号を取り、シカゴ大学大学院図書館学研究科で修士号を取った人物で、ウィスコンシン大学では一九九四年からメモリアル・ライブラリーのレファレンス・ディレクターとして勤務していた。彼のほかの専任職は、記録管理官、オーラル・ヒストリー・プログラム主任、写真・メディア専門アーキビスト、オペレーション・プログラム助手の四人で、残りの二人は、記録管理とオーラル・ヒストリーをそれぞれ補助する非常勤職である。UWアーカイブズの方針や規定については、副学長、大学教授、総合図書館システム代表、大学図書館委員会代表、州アーキビスト、大学アーキビスト、その他で構成される大学アーカイブズ委員会で決定される。

(二) 活動の概要

UWアーカイブズの使命は、HPで以下のように示されている。

「UWマジソン校アーカイブズは、永久的に歴史的価値のある大学の記録と情報を保存すること、記録管理サービスを提供すること、収集物における行政および学問研究を奨励する教育的資源として役立つこと」⁽²⁷⁾

ここには、①保存、②記録管理、③資源の活用という三つの使命が示されている。ここでは、ディレクターから入手した二〇〇四年度から二〇〇八年度までの年次報告書をもとに、上記の三つの使命に対してどのような活動が行なわれているかという視点で概要を紹介する。



写真1

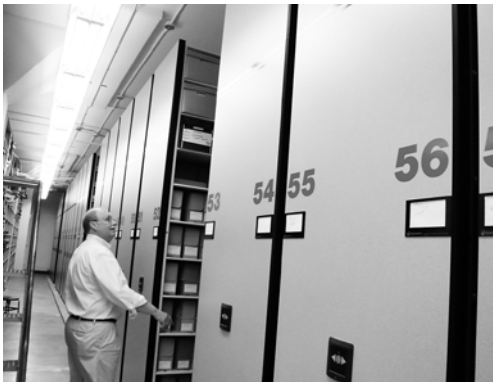


写真2

写真1 & 2 スティーンボック・ライブラリー地下室（UWアーカイブズのディレクターのナル氏とともに）

① 保存—情報の管理

UWアーカイブズは機関アーカイブであるから、理事会議事録、教授会議事録、コース・カタログ、学生の成績といった行政文書や公的記録はもちろんのこと、大学新聞、学生新聞、卒業アルバム、学生団体の記録、ファカルティの個人文書、学長と学部長や学科長との通信文書といったものも保存している。各種データベースの更新を含むコレクションの管理は、オペレーション・プログラム助手のジェイコブ（Cathy Jacob）が担当している。

これらの多くは、改修されたスティーンボック・ライブラリーの地下室に保管されている（写真1&2参照）。地下室には、個人情報に関わる文書を収納する鍵付きの部屋があり、それ以外の文書とは区別されて保管されている。

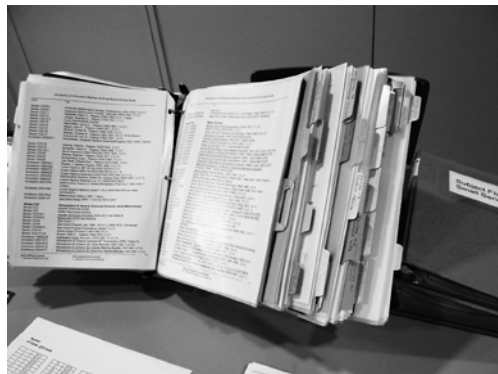


写真3

UWアーカイブズ所蔵資料の請求番号を記載した目録

る。これらの史資料に関しては、すべて一つの目録に請求番号がまとめられているため、記録が紛失することはなく、資料請求にも即座に答えられるという(写真3)。情報の厳格な管理とアクセスの確保は、アカウンタビリティを果たすための重要な要件だからである。

② 記録管理―現用文書から管理すべき記録へ

UWアーカイブズは、保存すべき対象を明示し、公的記録としてアーカイブズに移管するためのルールを細かく定めている。記録管理とは、「記録の創造・受理・維持・活用・処理に関して、効率的で組織的な統制を行なうことに責任を有する管理の領域」であり、「記録の様式に関する業務や処理についての証拠や情報を取り込み、維持するというプロセスも含まれる」³⁸⁾。これは、二〇〇一年に制定された記録管理の国際基準(ISO15489)にもとづく規定で、記録管理の必要性は、ウイスコンシン州法とウイスコンシン大学理事会規約でも概説されている。この業務には、専任職一人と非常勤職一人があたっている。

保存すべき対象は、「どういう物理的形狀であるかにかかわらず、学科や大学事務局、あるいは、大学人や事務スタッフによって、大学業務の処理に関わって作成され、生産され、実行され、受理され、そこに含まれている情報ゆえに当該機関やその継承者によって活動や機能の証拠として保持されている、あらゆる文書、書籍、写真、テー

図1 学科運営に関する情報の移管ルール⁽⁴²⁾

DEPARTMENT ACADEMIC ADMINISTRATIVE INFORMATION
http://archives.library.wisconsin.edu/records/schedules/GRS_DeptAcadAdmin.pdf

RECORDS SERIES TITLE	RETENTION	DISPOSITION	RDA
Department Meeting Minutes	5 years	Transfer to University Archives	A285-00649
Department Executive Meeting Minutes	5 years	Transfer to University Archives	A285-00650
Department Chair Correspondence	5 years	Transfer to University Archives	A285-00652
Ballots-Executive Committee Actions NOTE:Votes must be recorded	When votes are recorded	Destroy Confidentially	A285-00665
Department Budget Files	2 biennium's	Destroy	A285-00655
Department Subject Files	5 years	Transfer to University Archives	A285-00662
Course Handouts		Transfer one set to University Archives	A285-00657
Course Syllabi		Transfer one set to University Archives	A285-00658

ブ、フィルム、録画・録音、あるいは他の情報管理された収集された資料⁽⁴³⁾とされる。これに加えて、情報システムを介した電子媒体による通信記録やデータも保存対象となっている⁽⁴⁰⁾。それゆえ、大学の被雇用者として作成した文書は、どのようなものであっても、個人ではなく大学に帰属する⁽⁴¹⁾と考え、保存の責任を有する⁽⁴¹⁾。

現用文書は、図1のように、項目毎に保持する期限や処理が定められている。つまり、発生から廃棄までのライフサイクル全体を視野にいたううえで、管理すべき記録としてアーカイブズに移管される。したがって、現用文書の段階から、アーカイブズへの移管を念頭におく必要がある。

周知のように、ISO15489は、官民を問わず、すべての組織の記録管理のガイドラインとなっているが、アカウンタビリティを基調とするのが特徴である。具体的には、それまでの記録管理が、内部組織の業務効率化を主たる目的としていたのに対し、ISO15489にもとづく記録管理は、外部のステークホルダーへの説明責任を果たすものとなった⁽⁴³⁾。たとえば、ウィスコンシン大学理事会は、議事録、アジェンダ、報告書といった記録をHP上で公開しているが、これらを社会に対するアカウンタビリティの証左と位置づけている。記録を公開することによって、意思決定のプロセスを明確にし、責任の所在を明確にすることが、組織の透明性を高めるからである。

一九七三年以来、UWアーカイブズの記録管理官を務めたクンデによれば、記録

管理は大学のコンプライアンスを向上させるとい⁽⁴⁴⁾う。なぜなら、大学には、学生のプライバシーを保護する法律や医療保険の相互運用性と説明責任に関する法律の遵守が求められているため、ハッキングの脅威に対抗したり、訴訟や法的問題に備えたりするために、正確かつ安全な記録管理が必要だからである。さらに、彼女は、在籍率などの大学運営に活用できる情報を大学の最高情報責任者に提供することで、「記録管理者が、政策展開に携わり、戦略的なパートナーになる」とも述べている⁽⁴⁵⁾。記録管理は、「大学の活動を実証するものであり、詳細な説明を受けた上での決断に不可欠であり、アカウントビリティを維持し、総合的に社会に対する大学の使命を果たす⁽⁴⁶⁾」という考えである。したがって、記録管理を担う大学アーカイブズは、大学にとってアカウントビリティを果たすための不可欠な組織と位置づけられる。

③ 資源の活用ーデジタル化によるアクセスの促進

「将来構想報告書（一九九五年）における最大の課題は、メディアの多様化やインターネットの普及にいかに対応すべきかであった。そのため、目標とされたのは、第一に、スタッフのレベルでは、情報技術の革新に対応できる人材の育成であり、ワークショップや教育訓練による継続教育を実施することであった。第二に、プログラムのレベルでは、学内外のさまざまな部局、たとえば、情報技術局、総合図書館システム、技術支援部、州歴史協会などと連携して、効率よく的確に情報を活用できるプログラムを考案することであ⁽⁴⁷⁾った。

一九九五年以降、上記の報告書の指針に従って、情報技術への対応がすめられた。たとえば、同年に、ARMSのHPが作成・公開され、史料紹介や利用方法に関するニュースが掲載された。また、所蔵史資料の情報が、順次、オンライン蔵書目録(Madcat)に掲載されて検索可能となった。とくに二〇〇〇年代以降、デジタル化が進展

し、データベースの検索機能が充実した。これらにより、ウィスコンシン大学史研究は各段に効率化した。

UW システムでは、二〇〇一年にウィスコンシン大学デジタル・コレクション・センター (University of Wisconsin Digital Collection Center: UW DCC) が設置された。これにより、UW システムおよび州内の歴史的遺産を保有する機関や図書館と協力して、デジタル資料の収集と提供が開始された。そこには、本、雑誌、マニユスクリプトといったテキストベースの資料に加えて、写真、スライド、地図、印刷物、ポスター、音声資料、ビデオなど、多様なものが含まれる。UW DCC が提供するデジタル資料のうち、UW マジソン校に関わる情報提供を支えているのが UW アーカイブズで、とくに写真・メディア専門アーキビストの協力が大きい。これにより、いまでは次に示すような同窓会雑誌、大学新聞、卒業アルバム、学内ニュースレターなどのウィスコンシン大学独自の資料を現物のまま閲覧でき、写真や映像をふんだんに入手できる。

- The Badger Yearbook, 1885 and 1888-2009
- The University of Wisconsin: A History (4 volumes)
- Wisconsin Alumni Magazine, 11899—1990
- University of Wisconsin Alumni Directory, 1849-1919
- Wisconsin Engineer, 1896-2004
- University of Wisconsin Archive Images
- William J. Meurer Photoart album

さまざまコレクションのデジタル化もすすんでいる。たとえば、UW アーカイブズの著名なコレクションの一つであるアルド・レオポルド・コレクションは、二〇〇六年にアルド・レオポルド財団が National Historical

Publications and Record Commission⁽⁴⁸⁾から得た基金をもとに、デジタル化がすすめられた。アルド・レオポルド(一八八七—一九四八)は、生態学者で環境保全活動家であったウイスコンシンン大学教授で、手紙、写真、著作、草稿などが含まれている。これらはすべてデータベース化され、検索可能になっている。

UWアーカイブズが保存・公開する史料は、大学のみならず、ウイスコンシンン州のさまざまな歴史的・文化的遺産を含む。たとえば、二〇〇七年からオーラル・ヒストリー・プロジェクトの主任となったリーブズ(Troy Reeves)は、林産実験所から二〇〇〇ドルの寄付を受けてオーラル・ヒストリー・プロジェクトを遂行したり、地域の多様なグループと交流して住民のインタビューを記録するといったアウトリーチにも意欲的に取り組んでいる⁽⁴⁹⁾。これらの記録は、順次、デジタル化されている。

以上のようなデジタル化とデータベースの進展のおかげで、世界中からさまざまな史料へのアクセスが容易になった。これは、将来構想委員会報告書(一九九五年)で示された「マジソンの大学コミュニティに提供されているサービスの世界中のユーザーにネットワークを通じて提供する」ことにより、「この機関(ウイスコンシンン大学)を世界の卓越した研究大学の一つとして維持する」というねらいに沿うものである。つまり、大学アーカイブズは、大学の卓越性を世界中に認知させる働きを担っているわけである。

おわりに

本稿では、UWアーカイブズの発展経緯と今日の活動を明らかにしてきた。まず、発展経緯をまとめると、以下のようになる。UWアーカイブズは、一九五一年に百年史編纂の要請を受けて設立され、歴史学教授らの貢献によ

って発展した。一九七〇年代には、複数のアーキビスト専門職が雇用され、広大な所蔵スペースが確保されてコレクションが充実していった。アカウントビリティが要請されはじめたのは一九八〇年代で、アクセス確保の手段としてマイクロフィルム化がすすんだ。一九九〇年代になると、さらなる効率化と情報技術革新への対応が迫られ、大学図書館システム全体の改革の中でアーカイブズの見直しが行なわれた。所蔵スペースの枯渇という物理的限界を前にして、二十一世紀におけるアーカイブズの将来構想を議論する委員会が主体となって将来構想報告書（一九九五年）が練り上げられた。そのさい示されたのは、アーカイブズの情報を大学の「知的資本」ととらえ、大学の存在意義を広く社会に説明するために、史資料を収集・公開できるように記録管理の統合をすすめる、電子記録化するという原則であった。

次に、上記の原則に基づいて展開されている今日の活動として、以下の三点があげられる。第一は、プライバシーを保護しつつアクセスを確保するよう、情報を厳格に管理して保存することである。第二は、そのためにも、現用文書から管理すべき記録へと移管するガイドラインを徹底した記録管理サービスを行なうことである。国際基準に則る記録管理は、組織の透明性を高め、コンプライアンスを向上させるため、社会に対するアカウントビリティを果たすという考えである。第三は、デジタル化によってアクセスを促進することで、大学の資源の活用を推進することである。これは、ウィスコンシン大学の卓越性を世界に認知させるという意味をもつ。

以上から、UWアーカイブズが、国際基準に則した記録管理の徹底とデジタル技術の革新による情報公開の促進によって、アカウントビリティを果たそうとしていることが明らかとなった。これらは優れたアーキビスト専門職によってこそ可能であった。しかしながら、近年、厳しい財政削減によって、長年にわたって培われた知識と経験が失われつつある。具体的には、二〇〇八年の金融危機後、三〇余年にわたってUWアーカイブズを支えてきた三

人のアーキビストが年金削減の懸念から相次いで退職した。そのさい、退職者のうちの一人の後任は採用されず、定員が実質的に削減された。なかにはワークシェアリングを余儀なくされている職員もいる。こうした予算削減のなかで、補助的な業務の費用はプロジェクト・ベースの基金に依存しつつあるため、外部資金の獲得が求められている。それゆえ、アカウンタビリティの要請はますます強まる傾向にあると推察される。

註

- (1) 寺崎昌男『大学は歴史の思想で変わる―FD・評価・私学』東信堂、二〇〇六年、二七三―二七六頁。
- (2) 寺崎昌男『大学自らの総合力―理念とFDそしてSD』東信堂、二〇一〇年、一五―一五五頁。
- (3) 江原武一「アメリカにおける大学評価の改革動向」『立命館高等教育研究』(一〇)、二〇一〇年、一一六頁。
- (4) Nicholas C. Burckel, "Academic Archives: Retrospect and Prospect," in Christopher J. Prom and Ellen D. Swain, eds, *College and University Archives, Readings in Theory and Practice*, Chicago: Society of American Archivists, 2008, pp.10-18.
- (5) 寺崎昌男「大学アーカイヴズ(archives)とはなにか」寺崎昌男・別府昭郎『大学史をつくる―沿革史編纂必携』東信堂、一九九九年、二〇六―二〇九頁。
- (6) 坂本辰朗「アメリカの大学アーカイヴズ」『大学史をつくる―沿革史編纂必携』前掲、三七―一三七二頁、「アメリカ
- (7) 二〇〇九年九月に、ディレクターであるナル氏、および、写真専門のアーキビストであったシャメツラー氏に対して、UWアーカイヴズの発展経緯や現状に関して聞き取り調査を行なった。そのさい、シャメツラー氏が「アーカイヴズは記録保存に務めているが、自身の記録については無頓着である」と述べたように、歴史的経緯をまとめた論稿を発見することはできなかった。
- (8) 筆者は、一九九五年以来、UWアーカイヴズに対して、HP上の検索や電子メールでの資料問い合わせを行ってきた。現地での調査は、一九九八年、二〇〇一年、二〇〇七年、二〇〇九年、二〇一〇年の五回である。
- (9) 前述の聞き取り調査に加え、二〇〇九年および二〇一〇年に、オペレーション・プログラム助手のジェイコブ氏にUW

合衆国における大学史研究と大学アーカイヴズ」『近代日本研究』第二三巻、二〇〇六年、三五―三七頁。

- アーカイブズの史料 (University Archives Subject File, University of Wisconsin Archives, 以降「UA Subject File」の記述) の収集にご協力いただいた。
- (10) "Wire News, From the University of Wisconsin News Service, Madison 6, Wisconsin, " 6/20/1957, UA Subject File.
- (11) 坂本辰朗「アメリカ合衆国における大学史研究と大学アーカイブス」前掲, 三七頁。
- (12) 同論文, 三八頁。
- (13) "University Archives Show Facts of Records, Oddities, " *The Daily Cardinal*, Wednesday, Mar.30, 1960, UA Subject File. ただし、最初の大学理事會記録 (一八四八年) や最初の学生募集広告 (一八五七年) などの貴重な史料が発見・整理された。
- (14) "Just for the Records: UW Can Boast Of Its Excellent Archives, " *The Capital Times*, Madison, Wisconsin, Sep.4, 1971, UA Subject File.
- (15) A Notification from E.B. Fred to Chairman and Directors, Dec.16, 1952, Office of President, UA Subject File.
- (16) "The University Archives, " enclosed in a Notification from E.B. Fred to Faculty Members, Departmental Chairmen and Administrative Offices, and Departmental Secretaries, May 28, 1958, Office of President, UA Subject File.
- (17) A Notification from E.B. Fred to Faculty Members, Departmental Chairmen and Administrative Offices, and Departmental Secretaries, May 28, 1958, Office of President, UA Subject File.
- (18) "The University Archives, " enclosed in a Notification from E.B. Fred to Faculty Members, Departmental Chairmen and Administrative Offices, and Departmental Secretaries, *ibid*.
- (19) 「機関アーカイブ」とは「親機関によって作成され、受理された記録を保管する場」で、「収集アーカイブ」とは「親機関ではなく個人、家族、組織から資料を収集して保管する場」であるという。古賀崇「日米のアクセスを比較して」小川千代子・小出いづみ編『アーカイブへのアクセス』日外アソシエーツ、二〇〇八年、二〇〇頁。
- (20) Laurence Weber, "Archives Offer Key to Great 'U' Moments, " *The Daily Cardinal*, date unknown, UA Subject File.
- (21) Nicholas C. Burchel and J. Frank Cook, "A Profile of College and University Archives in the United States, " *American Archivist*, Vol.45, No.4, Fall 1982, p.411.
- (22) "Just for the Records: UW Can Boast Of Its Excellent Archives, " *ibid*.
- (23) "Feature Story, Archives Chronicle University History, " The University of Wisconsin-Madison/News Services, 12/28/1979, UA Subject Files.
- (24) 坂本辰朗「アメリカ合衆国における大学史研究と大学アーカイブス」前掲, 三七頁。
- (25) Burchel, *ibid*, p.17.

- (26) Robert Campbell, "Preserving Today for Tomorrow, Archives are yourhives," *Wisconsin Alumnus*, vol. 78, No.2, Jan., 1977, UA Subject Files.
- (27) *Ibid.*
- (28) *Ibid.*
- (29) たんぽぽ 以上のみなさん。 Stephen A. Masar ed., *The Charles R. Van Hise papers : guide to a microfilm edition*, Madison : State Historical Society of Wisconsin, 1986.
- (30) Committee on the Future of the Archives, *A Report on the Future of the University of Wisconsin-Madison Archives*, Feb.23, 1995, UA Subject File.
- (31) Stephen E. Atkins, *The academic library in the American university*, Parallel Press, 2003, p.36, University of Wisconsin Digital Collection, <<http://digicoll.library.wisc.edu/cgi-bin/History/History-idx?type=header&id=History.AcadLib>> Jan.31.2011.
- (32) *Ibid.*
- (33) *Ibid.*
- (34) ARMのは、HP上で使用され、プリンタの名称として使われてきた。ただし、正式名称ではなく俗称である。
- (35) David Null, "University Archives and Records Managements Services, Annual Report, 2007-2008," given by David Null, Sept. 2009 in Madison, Wisconsin.
- (36) "Sources of UW History," <<http://archives.library.wisc.edu/>
- (37) whistory.html> Jan.31.2011.
- (38) "University Archives, Mission Statement," <<http://archives.library.wisc.edu/ua.html>> Jan.31.2011.
- (39) University of Archives and Record Management, "Record Management Overview," <<http://archives.library.wisc.edu/records/Overview.html>> Jan.31.2011.
- (40) "Record Management Overview," *ibid.*
- (41) ただし、ナルによれば、電子メールや電子媒体のみで閲覧されるデータの保存の義務について周知されておらず、課題となっているという。そのため、電子媒体に関する記録管理のルールに関する教育普及活動に尽力してらる。David Null, "University Archives and Records Managements Services, Annual Report, 2007-2008,2008-2009," given by David Null, Sept. 2009 in Madison.
- (42) *ARMS Bulletin*, No.1,Fall 1997, revised Spring 2009, <http://archives.library.wisc.edu/records/bulletins/ARMS_1_rev.pdf> Jan.31.2011.
- (43) University Archives and Records Management, "HIGHLIGHTED RECORDS SERIES FOR DEPARTMENTS UNIVERSITY OF WISCONSIN-MADISON," <<http://archives.library.wisc.edu.2784/records/schedules/HighlightedRecSeries%207-2010.pdf>> Jan.31, 2011.
- (44) 小谷允志「記録管理のパラダイムシフト」『レコーダー・マ

- ネジメント』(五〇)、『二〇〇五年』四〇—五〇頁。
- (44) Nancy M. Kunde, "Reframing Records Management in Colleges and Universities," in Christopher J. Prom and Ellen D. Swain, eds., *ibid.*, p.197.
- (45) *Ibid.*, p.208.
- (46) *Ibid.*, pp.192-194.
- (47) *A Report on the Future of the University of Wisconsin-Madison Archives. ibid.*
- (48) 米国立公文書記録管理庁 (National Archives and Records Administration: NARA) の歴史資料の保存や刊行等を行う部署。
- (49) David Null, "University Archives and Records Managements Services, Annual Report, 2007-2008, 2008-2009," *ibid.*

Archives provide a better understanding of the development of the University. They also reflect the key issues of the day and give insights into how and why decisions were made. The Archives provides mission-critical services because the University is expected to be compliant and accountable to external agencies and bodies, and to the public community it serves.

UW Archives is now suffering from severe state budget cuts because of the 2008 financial crisis. They are losing experienced archivists and relying on external funds. The demand of accountability will be much more increased.

Historical Development and Current Challenges of the University of Wisconsin Archives

GOSHIMA Atsuko

Abstract

The purpose of this paper is to describe the historical development and current challenges of the University of Wisconsin Archives (UW Archives).

UW Archives was founded in 1951. Many of its historical materials were gathered by professors Curti and Carstensen to write the history of UW. UW Archives became enlarged after 1971, when UW system was created. The amount of records was expanded and several professional archivists were hired. In 1980s, the demand for accountability in higher education required performance-based budgets, so many records were microfilmed to conduct more effective and efficient research.

Early in 1990s, the Archives was integrated into General Library System. In 1995, "A Report on the Future of the University of Wisconsin-Madison Archives" was published for its strategic planning in the 21th century. The Report indicates that the information is the "intellectual capital," the vital resource to the University community. Therefore it is necessary to secure more space and more efficient management of records through electronic information systems.

The Websites and Digital projects have highly been developed in 2000s. The purposes of the UW-Madison Archives are to (1) preserve University records and information of permanent historical value,(2) provide records management services,(3)serve as an educational resource encouraging administrative and scholarly research in its collections. All University records are retained and sent to the Archives under the Records Disposition Authorization. The records in the